Urban Design Lab. Magazine

東京大学都市デザイン（西村・窪田）研究室
工学部都市工学科／工学系研究科都市工学専攻
http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/index-j.html

編集長　：矢吹剣一
編集委員：前川綾音　村本健造　安川千歌子
石井かおる　大森文彦　北川貴巳　松本綾

都市デザイン研マガジン vol.165　2012.02.25

真摯に向き合い、考え抜く！　―卒業論文・卒業設計審査会―

earnestly address the issue and think out! –The final defense of graduation thesis–

text maekawa

修士２年に引き続き、２月 14 日 15 日に卒業論文・卒業設計審査会が行なわれ、都市デザイン研究室からは４人が発表に挑みました。

The final defense of graduation thesis and diploma design was held on 14,15th Febrary, and 4 students gave a short presentation of their research.

平成 23 年度は岩田君が卒業論文、越村君、道喜君、萩原君が卒業設計においてそれぞれの研究成果を発表しました。今年は学年全体で 10 名以上卒業設計の選択者がおり、４年生の演習室は例年以上に大混雑！設計のお手伝いに連日様々な人が訪れ、終盤には研究室から頼もしい修士の助っ人も現れて熱気に包まれた演習室でした。そんな環境の中で、終盤には連日の徹夜も辞さずに駆け抜けた４人に怒濤の日々を振り返ってもらいました。

▲演習室にて B4 越村君と M1 の面々

岩田真之介
「大久保への韓国人社会の認知とまちづくりの研究」

韓流ブームに湧く大久保。暫定的に使われる路上の商業空間への視点やアンケートによる韓国人社会の大久保の認識について把握し、大久保の将来を示唆する。

右往左往の連続でした。研究室で論文を選択したのが僕だけで、ペースメーカーがいなかったのは今思うとちょっとつらかったです。卒業発表で機器が故障して、パワポが作動しないままに発表したことは一生忘れないでしょう。先生方そしてみなさんの協力無しには卒業論文は成し遂げられなかったでしょう。感謝いたします。그리고설문 조사를 도와주신 여러 분께도 감사를 드립니다!

▲リラックスした表情の岩田

▲対象地・大久保の活気あるまちなみ

越村高至　「川端（かわは）の間合い」

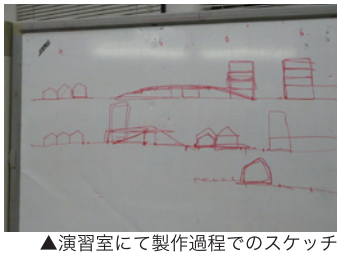
荒川沿いの自然堤防を活かし、家庭菜園等を既存の倉庫や町工場と共にまちの新たな機能として加え、それらをつなぐデッキに災害時の避難路としての顔も持たせた。

文献調査などから設計に跳ぶ段階、案を検討していく段階と、最後の最後まで迷走してしまったように感じます。

振り返ってみて、残念という気持ちがかなり強いのですが、多くのことも学ばせて頂いたと思います。

この卒業設計を通して、先生方、先輩方には大変お世話になりました。ありがとうございました。

▲堂々と発表する越村

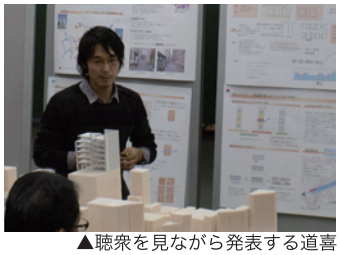


▲演習室にて製作過程でのスケッチ

道喜開視　「龍閑新道」

江戸時代、日本橋の問屋街を隆盛させた龍閑川。現在は暗渠となっているこの裏通りに、スキップフロアの建築やボイド的な公園によって再び光をあてる。

「自分の納得できるモノを作る」という目標は残念ながら達成できませんでしたが、構想に関しては必死に考えた分、納得できるものになったと思います。ただ、成果物では考えたものの半分くらいしか表現できなかったので、「他人の納得できるモノを作る」を目標に、また協力してくださった方々への感謝を忘れずに次のステージへ進んでいこうと思います。



▲聴衆を見ながら発表する道喜

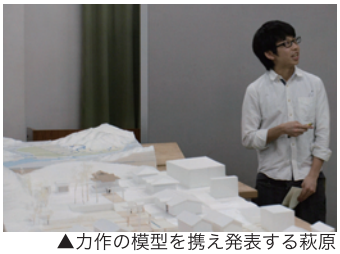
▲何度も手を入れたパネル製作の過程

萩原拓也　「まちの根幹」

東日本大震災に見舞われた岩手県大槌町町方地区において、現地を何度も実際に訪れることでまちを見つめ、まちの文化や湧水に着目した市街地復興を提案した。

今年中に、自分なりの問題として震災に向き合いたいと思い、大槌町の復興と文化をテーマにしました。

空間や文化だけでなく、生身の命を考えることに辛さや苦しさがあったのですが、先生方、先輩方のご指導に加え、大槌に関わる人々の思いに触れて、自分も何とかやり抜けたかなと思います。ありがとうございました。



▲力作の模型を携え発表する萩原

▲先生方からの質疑応答に挑む

新コーナー！

"Road to doctor"

An essay by doctoral student vol.1!

人数の多い都市デザイン研究室。もっとお互いの研究について知る機会を作ろう！ということで、博士課程のメンバーの研究内容に迫るコーナーです。第１回はD3のナッタポンさんです。

「文化遺産活用のための地域マネジメントの形成プロセスについて：「石見銀山とその文化的景観」の世界遺産登録をめぐる一連の出来事を事例として」

D3　パンノイ ナッタポン

持続可能な文化遺産活用について多くの専門家が長年様々な提言を行ってきたにも関わらず、世界中には文化遺産を活用した観光による悪影響に直面している地域がたくさん存在しています。そこで、本研究は文化遺産活用による悪影響への対策として地域がどのようなことを展開すればよいのかという疑問から出発し、持続可能な文化遺産活用を実現できた「石見銀山」を事例として研究を進めてきました。

石見銀山では、2007年の世界遺産登録に向けて約200人の市民の参加による持続可能な文化遺産活用のための計画策定が行われ、その計画を基に観光からの悪影響を防ぐための地域づくりが展開されました。本研究は石見銀山の世界遺産登録課程を分析することで、持続可能な文化遺産活用を実現するための地域づくりプロセスを明らかにすることを目指しています。

石見銀山の世界遺産登録のプロセスを調査するために、私は2010年12月から10か月間石見銀山に滞在しながら、関係者のインタビューや関係資料を収集してきました。地元住民および関係者の方々の協力のおかげで、昨年データ収集を終えることができ、現在大学でデータ分析を行いながら、論文を作成しているところです。

▲2005年に行われた石見銀山協働会議の様子

▲研究対象の石見銀山の中心部の大森町の住民集合写真

プロジェクト報告

清水 SHIMIZU-project プロジェクト

プロジェクト始動からもうすぐ１年。初めて迎える活動報告会でＭ１の２名が発表しました。

text_matsumoto

▲地域の方々に今年度の活動を報告

▲午前中は臨海部の現況を確認

２月24日（金）に開催された静岡市総合政策委員会にて、M1大森、松本が清水ＰＪの今年度活動報告を行いました。発表では、今年度の清水港周辺地域における歴史資源調査および港湾地区の将来像に関する提案の概要説明を中心に行い、発表後には商工会の方々から今後のＰＪの活動に対する率直なご意見を頂くなど、地元の方の清水港周辺地域に対する思い入れや熱意を感じる良い機会となりました。来年度は調査の継続と同時に、ワークショップなど地元の方々を巻き込んだ取り組みを実践し、清水港湾地区の魅力の周知を図っていきたいと考えています。

鹿児島 KAGOSHIMA-project プロジェクト

2011年11月に行なった社会実験･USKについて、研究報告会を行ないました。

B4 塚本 恭将

▲会場となった市役所講堂の様子

▲質疑応答での黒瀬先生

２月10日（金）、鹿児島PJチームは社会実験「USK（アーバンステーションカゴシマ）」の研究報告会を行うため現地を訪れました。黒瀬先生の力もお借りしつつ、取組の内容や調査結果、今後の鹿児島のまちづくりへの提案などについて発表しました。また西村先生による講演や鹿児島国際大学による発表も同時に行われ、多くの参加者に地元の街に対する新たな視点を提供することができたのではないかと思います。会終了後は市役所職員の方々と意見交換会も行い、来年以降のUSKのあり方や事業化について可能性に満ちた議論を行うことができました。

information

２・３月の予定

２月28日　POPS国際シンポジウム
３月９日　研究室マガジンについて首都大（観光ツーリズム専攻）との対談

編集後記

前川 綾音

発行が遅れすみません！初めてインデザインを使ったあの日からもう２年、気がつけば本号が最後の編集となりました。４月からは社会人生活が始まりますが、全く実感が湧いていない今日この頃です。約４年の本郷キャンパスでの生活、やはり毎朝見続けた大銀杏が印象に残っています。金色になる頃にはまた見に来たいな、と思ったりしています。